

ブリヂストン美術館の草創期と学芸員制度の成立 ——初代学芸員穴澤えみ子氏インタビューより

The Early Days of the Bridgestone Museum and the Establishment of Curatorial System
—An Interview with Anazawa Emiko, A First-Generation Curator

田所 夏子

TADOKORO Natsuko

はじめに

博物館法が公布された一カ月後にあたる1952年1月8日、アーティゾン美術館の前身であるブリヂストン美術館が開館した。当時美術館の運営は運営委員会と称する専門家グループが担っており、委員長は團伊能(1892–1973)が務めていた。三井財閥の團琢磨の長男であり東京帝国大学出身の美術史家、海外経験豊富で美術品コレクターでもあった團は、石橋正二郎(1889–1976)の信頼を得てコレクションの収集、美術館運営などにおいて助言を行っていた。運営委員会の構成として、『館報』1号(1952年度)の組織欄には委員長團伊能を筆頭に、委員：石橋幹一郎、猪熊弦一郎、富永惣一、嘉門安雄、谷信一、主事：岩佐新、嘱託：徳大寺公英と記されている。この顔ぶれから、石橋正二郎の長男幹一郎のほか、それぞれ画家や美術史家、美術評論家、美術ジャーナリストといった専門家が中心となって館の運営に携わっていたことがわかる。

組織欄に学芸員が明記されるようになるのは『館報』6号(1957年度)からで、六條隆次、山上隆之輔、大井えみ子の3名がその職務にあたった。なかでも大井氏(現在は穴澤えみ子。以後、

穴澤氏と記載する)は、ブリヂストン美術館の初代学芸員のひとりであり、最初の女性学芸員であった点は注目に値する。穴澤氏は開館初期の学芸業務に携わり、1962年にパリの国立近代美術館で開催された石橋コレクション展(*La Peinture Française de Corot à Braque dans la Collection Ishibashi de Tokyo*「東京石橋コレクション所蔵——コローからブラックに至るフランス絵画展」1962年5月4日–6月24日開催。以後、「里帰り展」と略す)に際して現地へ同行し、同展発案者である美術史家のベルナルド・ドリヴァル(1914–2003)とも親交を深めた (figs. 1, 2)。

筆者は、2012年にブリヂストン美術館で開催した「パリへ渡った「石橋コレクション」1962年、春」展の調査に際して穴澤氏にヒアリングをおこない、当時の「里帰り展」開催に至る経緯や、現地での反応、また夫である美術史家の穴澤一夫(1926–2003)とドリヴァルとの家族ぐるみの交流など、当事者ならではの貴重な証言を得た (fig. 3)。その成果は同展展覧会カタログに活かされている¹。また、2022年には当館学芸員であった貝塚健氏(現千葉県立美術館館長)と編集者の黒川典是氏によってブリヂストン美術館の歴史に関する聞き取り調査が行われ、その時の穴澤氏へのインタビュー記録が残されている。その主



fig. 1
麻布永坂の自邸にて。左から2人目がベルナルド・ドリヴァル、3人目が石橋正二郎(1961年)
At his home in Azabu-Nagasaka, Tokyo. Second from left, Bernard Dorival and third from the left, Ishibashi Shojiro, 1961



fig. 2
東京石橋コレクション所蔵——コローからブラックに至るフランス絵画展」ポスター (1962年)
Poster for *La Peinture Française de Corot à Braque dans la Collection Ishibashi de Tokyo*, 1962



fig. 3
「パリへ渡った「石橋コレクション」1962年、春」展ポスター(2012年)
Poster for Ishibashi Collection Selected for the Exhibition in Paris,
Spring, 1962, 2012

な内容は、美術館採用の経緯、学芸員資格認定試験について、美術館草創期の回想といったものであった。そこには1950-60年代にまだ法制度が出来たばかりだった学芸員、特に当時極めて少数派であった女性学芸員の側面があらわれている。そこで本稿では穴澤氏の証言をもとにブリヂストン美術館の草創期と学芸員制度成立の沿革を、女性学芸員の割合に注目しながら概観したい。

博物館法の成立とブリヂストン美術館

博物館法は1951年12月1日に公布され、翌年3月1日に施行された。その冒頭の第1条には「この法律は、社会教育法 の精神に基づき、博物館の設置及び運営に関して必要な事項を定め、その健全な発達を図り、もつて国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする」とある。社会教育法が成立したのは1949年のことで、その翌年に図書館法が制定されたのに対して博物館法はやや遅れる形で成立した。その主な理由のひとつに、博物館従事者の資格が規定されていなかったことがあげられる²。当時博物館長や学芸員として未経験者が登用されるのが常態化しており、それゆえに博物館法第4条には「3. 博物館に、専門的職員として学芸員を置く」と記され、第12条において博物館として登録を受けるためには「博物館資料」、「建物及び土地」、「年間150日以上開館」といった要件とならび、「学芸員その他の職員」が必要要件と定められている。当時学芸員は、専門分野によって人文科学学芸員と自然科学学芸員との2つに分かれていた。そして学芸員資格を取得するためには大学もしくは学芸員講習で、文部省が定める博物館に関する科目の

単位を修得する必要があるとされていた。

公布の翌年1952年7月から8月に東京藝術大学で国内初の学芸員資格取得のための講習(博物館学芸員講習)が実施され、65名が参加した³。これは主に現職者の資格取得のために設けられたもので、博物館法の経過措置として一定の要件を満たす現職者すなわち学芸員暫定資格者に対し、法制定後3年間のうちに講習を受講することによって資格を付与するとしたものであった。この年、学芸員講習受講者は東京国立博物館、国立科学博物館、上野動物園に分かれて3週間の実習を行ったとされ、46名(人文科学33名、自然科学13名)が合格した⁴。ちなみにこの年の学芸員暫定資格者は人文科学で257名、自然科学で154名の合計411名である。実習で3週間という長期間の拘束が負担になることや、地理的な条件により受講ができないことなどが原因で、講習による資格取得者が全体の1割程度に留まっている。暫定資格の有資格期限は1955年2月末までであるにも関わらず、結果的に学芸員講習が実施された3年間で人文科学学芸員は182名、自然科学学芸員は100名が受講し、その割合は全体総数からしてかなり少なかった。しかし講習未受講者の大半は多年の経験を有する博物館の中心的存在であることや、有資格者がいなくなることで博物館登録を取り消される館がでてくることなど、当時は学芸員の資格認定制度の整備が喫緊の課題として問題視されていた⁵。

こうして1955年7月の博物館法の一部改正により博物館学芸員講習は廃止され、人文系と自然系学芸員を一本化し文部大臣が資格を認定する制度に改められた。これに伴い同年10月には博物館法施行規則の全面改定がなされ、学芸員資格は試験および無試験による認定制度に改められた。

一方、冒頭に記したようにブリヂストン美術館が開館したのは1952年1月8日であり、博物館法公布の一カ月後のことであった。この年の4月、サンフランシスコ講和条約が発効されようやく日本が主権を回復したのであり、戦後復興期にあった東京において日本近代および西洋美術のコレクションを常設展示して公開する美術館が誕生したことは、大きな喜びをもって迎えられた⁶。

しかしその反面、開館当初は未だ博物館法における博物館登録を受けていなかったため入場税の課税対象となっていた。そのことを危惧した日本博物館協会は、1952年7月17日、東京都知事に対し異例の陳情書を提出している⁷。少し長くなるが、当時のブリヂストン美術館の社会的位置づけがうかがえる内容であるため、以下に全文引用する。

陳情書

昭和二十七年七月十七日

社団法人日本博物館協会 会長 徳川宗敬

東京都知事 安井誠一郎殿

ブリツチストン美術館にたいする入場税の免除申請の件

本年1月開館されましたブリツチストン美術館にたいし、目下入場税が徴収されておりますが、同館は本会の会員であり博物館として必要な事業を積極的に遂行しておりますのでなにとぞ同館を課税対象から、除外してお取り扱い下さいますよう左記理由を付して、この段陳情申し上げます。

理由

- 一、ブリツチストン美術館は、石橋正二郎氏蒐集の西ヨーロッパ近代の一流絵画をはじめ、故藤島武二の代表的作品を常時公開展覧し、或いは特別展覧会を開催する等、特に西欧絵画の名作に親しむ機会にめぐまれない日本の美術界をはじめ、一般公衆にたいし、頗る重要な役割を果たしている。同館は陳列品の内容においても、また、それが常時公開されている点においても、西欧近代美術館として本邦における殆んど唯一の存在となっている。同館は経費を投じて、新しい展示方式を採用して観賞の便をはかっている外、単に展示活動に止らず、美術に関する学術講演や映画鑑賞を通じて、公衆および学校生徒に対して、博物館として必要な普及活動を絶えず積極的に実施している。
- 二、ブリツチストン美術館は、会員として本会の活動に協力しており、同館が今後日本の博物館事業の発展に果たす役割はますます期待されている。
- 三、右のように同館は、博物館として頗る重要な社会教育的役割を果たしているの、実情を御審査の上、本邦博物館事業を育成する意味において、何とぞ免税措置を講ぜられるよう希望する。

東京国立近代美術館が開館するのが1952年12月、国立西洋美術館の開館が1959年6月であったことから、都内で近代美術あるいは西洋美術のコレクションがみられる美術館としては、ブリチストン美術館が最初であった。しかし学芸員有資格者を置いていなかったことなどが要因となって、開館当初は博物館登録を受けていなかった。当館が博物館相当施設として東京都から認定を受けたのは開館3年後の1955年2月であり、それは初代学芸員のひとりである山上隆之輔が、法改正前の1954年に学芸員講習を修了し人文科学学芸員の資格を取得したことによってようやく得られたものであった⁸。当館の歴史は戦後日本の復興と博物館法の成立、そして学芸員資格認定制度の整備と併走する形で始まったと言えるだろう。

学芸員制度の成立

——博物館法施行当時の女性学芸員の割合

1952年の博物館法施行当時、現職者に対して学芸員暫定資格が与えられた。学芸員暫定資格者となったのは人文科学257

名、自然科学154名の計411名で、そのうち女性は人文科学11名、自然科学2名とわずかであった⁹。そしてさらにその中から1952年8月に東京藝術大学で実施された最初の博物館学芸員講習を受講し修了したのが、人文科学33名、自然科学13名で、うち約4名が女性であった。日本博物館協会が刊行する『博物館研究』によれば、学芸員講習による資格取得制度が終わるまでの修了者数は以下のとおりである¹⁰。女性の人数については、修了者名簿記載の名前から判断しているため、多少の誤差があることを予めお断りしておく。

学芸員講習修了者数一覧：

1952(昭和27)年度
人文科学33人、自然科学13人、計46人(うち、女性約4名)
1953(昭和28)年度
人文科学57人、自然科学35人、計92人(うち、女性約4名)
1954(昭和29)年度
人文科学92人、自然科学52人、計144人(うち、女性約9名)
合計
人文科学182人、自然科学100人、計282人(うち、女性約17名)

当時女性学芸員は総数の1割にも満たない少数であったことがわかる。

当館で最初の女性学芸員となった穴澤えみ子氏(1933-)は、学芸員試験に合格した女性第一号であった¹¹。長野県諏訪郡岡谷出身の穴澤氏は、養蚕業に関わる薬品研究者の父と、母、そして兄二人、弟二人という家庭に一人娘として育った。母は先進的な考えの持ち主で、女性も男性も関係なく進学や就職を応援してくれたという。学習院短期大学文学部に進学し、卒業時に同大学文学部国語国文科3年に移り、卒論は芭蕉の弟子、河合曾良の随行日記『奥の細道随行日記』について執筆した。大学で團伊能の娘瑠子と親しくなり、当時ブリチストン美術館の運営委員長を務めていた團に見込まれ、1955年の夏に美術館に就職。学芸員資格取得のための勉強に励みながら、1956年2月、博物館法改正後最初の学芸員試験(於、東京藝術大学)に臨んだ。美術館との出会いについて、穴澤氏は次のように振り返る。

今のお若い方には想像もつかないくらい、私の少女時代は戦争に左右され、勤労奉仕に明け暮れた何もない時代でした。私が女学校2年のときに終戦だったんです。その頃は教科書も何もない。特に戦争になってから、ほんと藁半紙、木片の入っているような藁半紙でね、字を書くと裂けてしまう。そういうときに初めて、高校1年か2年のときに美術の教科書というのができました。たしか「美術工芸」という科目でした。そこにね、初めて色が付いた絵の図版があったの。2点。それが、ピサロとシスレーだったのね。

(中略)

それで、《飛青磁》がありますでしょう。あの《飛青磁》、博物館にも同じようなのがありますね。ブリヂストンにも《飛青磁》がある。それも高校の美術の本に出ていました。その頃から、これらの美しい作品に憧れていましたから、それを発見したときはとてもうれしかったですね、ほんとに。戦後のまだあらゆるものが教養として、情報として入ってこない時代に、その色の入った作品図版が出た。それがブリヂストンの所蔵だった。それから私のブリヂストンのお付き合いが始まりますね。

ですから、学芸員の話老先生〔筆者註：團伊能〕に言われたときに、「ブリヂストンのあれね、感動をまた得られるのなら」と思いまして、引き受けさせていただいたんです。

(中略)

大学を出て就職が国際交流基金〔筆者註：当時、国際文化振興会〕に決まっておりましたが、まだ交流基金の体制も定まっておらず、その間に、團先生から「君、今度、博物館法ができて、それで学芸員の国家試験を受けてみてくれないか」と、お話があったんです。全部で13科目あるうち、大学で取得した単位をいくつか免除してもらいましたものですから、受験するのは6科目でしたかしら。それで、ブリヂストンに入って、勉強して、半年後にその試験を受けることになりました。

ここで團の発言としてでてくる「博物館法ができて」というのは、1955年7月に「博物館法が一部改正され学芸員の認定試験制度ができたので」と読み替えて良いだろう¹²。すでにブリヂストン美術館は博物館相当施設として指定を受けていたが、法改正により学芸員講習が廃止になると同時に、従来の博物館相当施設は准博物館としての指定制度に切り替わっていた¹³。つまりこのとき團は、新制度における博物館登録を受けるにあたり、新たに出来た認定試験制度による学芸員資格取得者の必要性を認識していたと考えられるのである。

穴澤氏が受験した1956年2月の学芸員資格認定試験の合格者は31名であった。そのほか、無試験認定合格者が84名であった。穴澤氏によれば、当時試験に合格した女性は31名のうちわずか3名であったという。その割合は、合格者全体の約1割にあたる。

3人受かったという話を聞きました。お会いすることはなかったんですが、お一人がNHKの愛宕山の放送博物館。博物館をつくるにあたって、その方も私と同じように。それから國學院大学の博士課程の方がいらしたんですけども、その方と私と3人でした。國學院大学の博士課程のうちにそういう資格を取ってどうなるのかしらと思いましたら、あとになってわかったのですが、國學院大学は博物館を持っていらないですよ、それを公に認めるためには必要だった。それだったのかと納

得できました。

法改正以前の女性学芸員は3年間で約17名いたが、全員が現職者であった。1955年の法改正は、従来よりも現職者以外の受験資格者の幅を広げたことがひとつの特徴であり、教員免許を有する教育機関での実務経験者なども新たにその対象となっている。しかし合格者であっても博物館実務経験一年を経過しなければ正式な認定合格者にはなれないという留意点もあった。この年の合格者のなかには、神奈川県立近代美術館（1951年開館）の朝日晃（1928–2016）や、井関正昭（1928–2017）といった現職者も含まれていた。実際、試験問題のうち口述試験の内容は実務経験者向けの傾向があったようだ。従来の学芸員講習が現職者（学芸員暫定資格者）への資格付与を目的としていたことを考えると当然のことだが、穴澤氏もすでにブリヂストン美術館の職員であったとはいえ、就職してまもない時期に前例のない学芸員試験に臨むプレッシャーは相当なものであっただろう。

穴澤氏による合格者手記には「だから合格証書を手にして予想外の吉事と喜ぶものゝ、名実共に学芸員となれる日のほど遠いことを痛感せざるを得ない。勿論私の場合一年間の実務経験が要求されている訳であるが、（中略）それ故理論に終る筆記試験に対し、口述試験の傾向は、未経験の者に実際の経験が如何に大切な事かその必要性を深く考えさせる点に於いて、又その反面長年の経験を有する者を評する絶好の場所として、今後も当然あのように実際的な問題であるべきものと思ひ、且つそうあつてほしいと思つてゐる」と記されている¹⁴。穴澤氏が学芸員試験に合格し資格を取得した後の1956年7月14日、晴れてブリヂストン美術館は東京都教育委員会より博物館としての登録を受けることとなった。

ブリヂストン美術館草創期の回想 ——土曜講座、作品カード、里帰り展

学芸員としての穴澤氏は、六條、山上とともに主に展覧会の作品借用や土曜講座の実務をおこなっていた。当時の担当業務について次のように語っている。

そうです。その都度、その分野の専門家が現れて、土曜講座の雰囲気というのは、本当にすてきで豊かでしたね。皆さんの意欲や積極的な思いがあふれている講座だったような気がするんですよ。だから仕事を辞めてからも、どこかで土曜講座の話が出て、「あれはいいですね」「行ってきました」なんて言われると、うれしくなってしまう。我がことのように、私にとってはね。

(中略)

あのときは岩佐新さん、六條〔隆次〕さんね。六條さんは、

私は本当に尊敬していました。そのお二人に、山上さんが学芸のほう。経理のほうは、また別な方たちがいらっちゃって、人数が少なかったんですよ。小さいお部屋にパパパツというだけ。何しろ、まだ作品をどういうふうに整理していいのかという方法論もない時代です。もし、あのときにお手伝いしたものが残っているのでしたら、それこそ子どものメモ帳みたいなもんだと私は思っています。

ですから、パリに行って近代美術館で記録や資料を拝見したときに、「うわー、すごいな」と思いました、日本と違って。ブリヂストンは手書きで何か書くだけでしたからね。まだ体制ができていなかった。戦後の、ほんとにまだ戦争の跡がいっぱい残っている時代ですから、記録を残すとか、整理をするというところまでいってなかった気がしますね。

かつてブリヂストン美術館では所蔵作品の基本情報や展覧会歴、文献などを「作品カード(通称六條カード)」に手書きで記録をしていた。現在はデータベースシステムを活用しているが、その元となるデータはこの「作品カード」の情報である。穴澤氏によれば、六條がカードに手書きする際の資料集めなどを手伝っていたという。ブリヂストン美術館がパリの近代美術館で記録整理の手法を学んでいたことは興味深い事実である。実際、六條がパリでみた作品カードの収納ケースを帰国後特注で作らせて使っていたことも穴澤氏が証言している¹⁵。彼らがパリへ行ったのは、1962年にパリの国立近代美術館で開催された石橋コレクション展(「里帰り展」)のためであった(figs. 4, 5)。穴澤氏はその開会式やレセプションなどに立ち会い貴重な証言を残している。

ブリヂストンの地下1階のアラスカ[筆者註:当時、美術館関係者の会合などで頻繁に利用されていたレストラン]も使いましたけれども、有楽町にあった朝日新聞本社にもアラスカがあって、そこも使ったことがありますね。そこでマナーをいろいろ。



fig. 4
会場となったパリ国立近代美術館(現パレ・ド・トーキョー)
The venue, Musée National d'Art Moderne, Paris (now the Palais de Tokyo)..

奥様[筆者註:石橋正二郎の妻富久]とレセプションに出席するために、ローブデコルテやお着物のときに、手を上に上げてはならないとか、手袋の位置とか、そういうことを諸事にわたり、詳しく教えられました。私も定かではないのですが、美智子上皇后のご指導をなさった方をお呼びになって、マナーを厳しく教えていただきました。

そして、着物からローブデコルテ、洋服を、みんな私の分まで用意くださったの、奥様が。これは内々の話で、私としては本当に驚きでした。立派にレセプションを、見事にこの展覧会を成功させるために、あらゆることに気をお遣いになったと思うのですね。まだ日本人が外国に自由に行くというのなかなかできない時代ですからね。

それでね、奥様と私の間には年齢の差があり、そうすると、着物も三越や高島屋で頼むときに、奥様は割合シックなもので、留め袖でも控えめに。私をやはり華やかにさせる、でも、日本の古典的な美しいものをというので、とても配慮してくださってね。そういうことまで全部。そして、向こうに参りました。

ほかの行事についてはいろいろ書かれていますけれども、そのときの様子、空気感というのはやはり書かれていないと思いますのでね、それはお話したい。ロワイヤル・モンソーというホテルにお泊まりになっていて、そこで、ご夫妻主催のレセプションがあったんです。6月4日。昼間は展覧会の開会式がありまして、夜、そこでレセプション。そうしましたらね、それこそ昔のフランスの王族のしきたりのようにレセプションの際に、入口でジャリジャリーンという音がする、それこそ四天王が持っているような。

(中略)

それから扉の音もね。その音に続いて「何とかご夫妻がみえた」というのをフランス語で大きな声で言うの。そうすると、上のほうでご夫妻は、この次にみえる方は誰だということを、通訳を介して理解される。そのときの華やかな音。ほ



fig. 5
パリにて。左から岩佐新、穴澤えみ子、富永惣一、一人あけて石橋正二郎、穴澤一夫(1962年)
In Paris. From the left, Iwasa Shin, Anazawa Emiko, Tominaga Soichi, one open, Ishibashi Shojiro, Anazawa Kazuo, 1962.

んとに昔の素晴らしい貴族の集会でしたよ。そういうのをちゃんとなさったの、ご夫妻は。実にご立派でした。それは書かれていないですね。本当に見事でした。

だから、日本の石橋さんのコレクションの質にふさわしい、非常に知的な、恥じない雰囲気をもとにもうつくられていたのです。それは素晴らしかった。だから、そういうときに恥をかかないように、お供の同行者にもちゃんとしたマナーを学ばせてくださいました。

この「里帰り展」は、美術史家のベルナール・ドリヴァルによって企画され実現したものであった。穴澤氏は夫である美術史家の穴澤一夫とともにドリヴァル一家と親交を結び、その交友を通してフランス式のおもてなしに感銘を受け、帰国後本格的に日本料理とフランス料理を学んだ。出産を機に職を辞した穴澤氏は、フランスでの経験を活かしその後料理教室を営むこととなる。

一夫はもちろん西洋美術館[筆者註:国立西洋美術館]の仕事をしていたが、いろいろお手伝いできることはさせていたいただきました¹⁶。お役に立てることは。皆さんとお付き合いがあるから、彼なりにやったと思っていますけれども。

ドリヴァルさんと主人の対談のラジオ番組がありました。どこかに書いてございましたね。6月10日。そのときはね、富永[筆者註:惣一]先生と、それから坂倉[筆者註:準三]先生とね、あるギリシア彫刻のコレクターのところへ作品を観に行っていたんですよ。それで主人の放送があるというので。そのとき誰か一緒にもう1人いたんですけども、時間が来るのに、ラジオを放送するシステムがまだレストランにも入っていませんでした。今は携帯で何でもわかるんですけど、昔はなかった。それで、スロットマシンが置いてあるようなカフェに「ラジオはあるか」と富永先生がお聞きになったんです。そしたら「あります」と。「あと何分で始まるから聞かせてくれ」と言って、そこでスロットマシンのそばで聞かせてもらったことがありましたね。今と違って情報が簡単に伝わらない時代ですからね、面白かったですよ。ラジオあるか、ラジオあるかって聞いて回って。

それから一番驚いたことは、その当時のパリの建物は半分も洗われていなかったんですよ。戦争で黒くなっていたの、ノートルダムも。(中略)だから、パリは半分、黒い。その時代にその展覧会をしたわけですから、すごいことです。

(中略)

そうね。何ていうのかしら、人を感動させるもの。この料理の世界もまた芸術の世界でしょう。料理は総合芸術だって穴澤にも言われましたけどね。美の世界に目をひらいてくれたのもブリチストンのお陰ですね。

今の若い皆さんが学芸員として活躍していらっしゃるご様

子、それから、女性がいきいきと仕事をしていらっしゃる、そういう世界になったっていうのはね、うれしいです。とてもうれしいですよ。だから、皆さん、一生ね、その感情、喜び、輝きを持続けていただきたい。今、90になる私が思うことはそれです。美術館の学芸員って本当に素晴らしい仕事ですから。

むすびにかえて

博物館法の成立とほぼ時を同じくして誕生したブリチストン美術館は、法整備の過程と併走するように美術館としての組織体制を整えてきた。そして、学芸員試験に合格した女性第一号で、ブリチストン美術館の初代学芸員のひとりである穴澤えみ子氏による証言は、その当時の貴重なオーラルヒストリーとなっている。穴澤氏は戦後間もない時代に大学へ進学、就職をし、結婚後も仕事を続けた先進的な女性である。当時の女性学芸員は有資格者全体の1割にも満たない少数派であり、それ故に様々な苦労があったはずだが、その発言はつねに前向きで進学や就職を後押ししてくれた母や、美術館との出会い、石橋夫妻やドリヴァルなど仕事を通じて出会った人々への感謝の心に充ちている。

近年日本の美術館・博物館における女性館長の活躍が注目を集める一方で、その比率は2割にも満たない¹⁷。逆に学芸員の数は女性が圧倒的に多く7割以上を占めており、その背景には雇用条件の問題やジェンダー・ギャップの問題などが根強く残っている。しかし多様な問題を抱えるこのような時代にこそ、学芸員という仕事、そして女性がいきいきと活躍する社会への根源的な希望を喚起する穴澤氏の言葉は、私たちの心に温かく響くのではないだろうか。

最後に、今回このような形で貴重なインタビュー記録を載せることをご快諾くださった穴澤えみ子氏に心から御礼申し上げます。また本稿執筆にあたり貝塚健氏、黒川典是氏によって行われた2022年の聞き取り調査の一部を、部分的に軽微な加筆修正のうえ掲載させていただきましたことをお断りします。

(公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館 学芸員)

関連略年譜

年	主な出来事
1933(昭和8)年	2月、穴澤えみ子氏、長野県諏訪郡岡谷に生まれる。
1949(昭和24)年	6月、社会教育法の制定。 博物館は、社会教育の機関であると位置づけられる。
1951(昭和26)年	4月、穴澤氏、学習院短期大学文学部に入学。 11月、神奈川県立近代美術館、開館。 12月、博物館法制定、公布(1952年3月施行)。
1952(昭和27)年	1月8日、プリチストン美術館、開館。 2月、国際博物館会議(ICOM)、日本国内委員会の加盟を承認する。 5月、博物館法施行規則の制定。 学芸員の資格などを制定した。 7月、博物館学芸員講習実施(7/21-8/22、実習:-9/18)。 会場:東京藝術大学。65名が参加し46名が修了。 学芸員講習修了者数一覧:人文33人、自然13人、合計46人(うち、女性約4名) 12月、東京国立近代美術館、開館。
1953(昭和28)年	7月、博物館学芸員講習実施(7/13-8/22)。 会場:東京藝術大、大阪大学 学芸員講習修了者数一覧:人文57人、自然35人、合計92人(うち、女性約4名) 9月、博物館法施工令の一部改正。 学芸員の暫定資格の決定。
1954(昭和29)年	7月、博物館学芸員講習実施(7/13-8/22)。 会場:東京藝術大、大阪大学 学芸員講習修了者数一覧:人文92人、自然52人、合計144人(うち、女性約9名) ※山上隆之輔、学芸員講習(於、東京大学)修了。
1955(昭和30)年	2月10日、プリチストン美術館が東京都から博物館相当施設に指定される。 3月、穴澤氏、学習院大学文学部国語国文学科卒業。 夏、穴澤氏、プリチストン美術館に就職。 7月、博物館法の改正。 学芸員資格取得のための講習を廃止。自然系、人文系学芸員を一本化し、文部大臣が資格を認定する制度に改めた。また、文部大臣が博物館相当施設を指定できるようになった。 10月、博物館法施行規則の制定。 博物館法の改正を受けて、学芸員資格に関する規定を全面改定。
1956(昭和31)年	2月、第1回学芸員資格認定国家試験実施(2/18-19)。 会場:東京藝術大学、大阪大学 試験合格者:31名(うち、女性約3名)、無試験合格者:84名 ※穴澤氏、試験に合格し資格取得。 7月14日、プリチストン美術館が東京都教育委員会より博物館に登録。
1959(昭和34)年	6月、国立西洋美術館、開館。
1962(昭和37)年	4月、穴澤氏展覧会準備のためパリへ。 5月、パリの国立近代美術館で石橋コレクション展を開催(5/4-6/24)。

本年表は、以下の報告書を参照し関連する事項を編集、追加した。
「1. 戦後の博物館に関する施策の推移」『平成20年度日本の博物館総合調査研究報告書』財団法人日本博物館協会、2009年3月、
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/hokoku/h20/pdf/r1409474_05.pdf (2024年8月23日アクセス)

註

- 『パリへ渡った「石橋コレクション」1962年、春』展図録、石橋財団プリチストン美術館、2012年。
- 栗田秀法「第1章博物館概論」栗田秀法編著『現代博物館学入門』ミネルヴァ書房、2019年、18頁。
- 浜田弘明「資料2 博物館学芸員養成の現状と課題」『文化審議会博物館部会』2020年1月17日、https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/hakubutsukan01/03/pdf/92000001_02.pdf(2024年7月6日アクセス)
- 栗田秀法「博物館法の条文解説」前掲書2、269頁。
- 深見吉之助「〈論説〉博物館学芸員に関する問題」p. 1、および鶴田総一郎「学芸員の資格等に関する行政上の諸問題について」31-37頁(『博物館研究』no. 4、5合併号(学芸員問題特集)、日本博物館協会、1954年6月所収)。
- 詳しくは次の論文にも紹介した。田所夏子「はじまりから、いま。1952-2022—コレクションの成り立ち、石橋正二郎の欧米歴訪、そしてアーティゾン美術館へ」『はじまりから、いま。1952-2022』展図録、石橋財団アーティゾン美術館、2022年、16-20頁。
- 「プリチストン美術館にたいする入場税の免除申請」『日本博物館協会会報』15号、1952年8月1日、6-7頁。
- 「昭和29年度学芸員講習修了者名簿」『博物館研究』no. 8、1954年9月、19頁。
- 「博物館学芸員暫定資格者の発表」『日本博物館協会会報』17号、昭和27年10月1日、13頁。
- 資格取得者の名簿、男女内訳は以下を参照した。
1952(昭和27)年度:「学芸員講習の終了証明書を交付」『日本博物館協会会報』18号、昭和27年11月1日、5-6頁、1953(昭和28)年度:「彙

報:昭和28年度の博物館学芸員講習』『博物館研究』no.1、日本博物館協会、1954年2月、13-15頁、1954(昭和29)年度:「昭和29年度学芸員講習修了者名簿』『博物館研究』no. 8、日本博物館協会、1954年9月、17-22頁。

11. 穴澤氏が受験した1956年2月の試験には、女性が3名ほど合格している。合格者名簿は、以下を参照した。「学芸員資格認定試験合格者名簿」『博物館研究』vol. 29、no. 3、日本博物館協会、1956年3月、9-11頁。
12. 穴澤氏自身による手記には、次のように記されている。「学芸員の認定試験と云う制度が今年できたと聞いたばかり、という頼りなさの上に、当然集つて来る多くの博物館勤務年間の長い人々の間に混つて、学士称号保持と云うそれだけの資格で受験しなければならないと妙に張切つた当時の不安と焦燥は、全く今思い出しても哀れな程深刻なものであつた。」(大井えみ子「〈合格者手記〉試験全般の感想」『博物館研究』vol. 29、no. 3、日本博物館協会、1956年3月、16-17頁)。
13. 川崎繁「〈広報〉学芸員の資格認定と博物館相当施設の新指定制度について——従前の博物館法施行規則の全面改正」『博物館研究』vol. 28、no. 10、日本博物館協会、1955年10月。
14. 大井えみ子「〈合格者手記〉試験全般の感想」『博物館研究』vol. 29、no. 3、日本博物館協会、1956年3月、16-17頁。
15. 2011年6月28日ブリヂストン美術館において穴澤えみ子氏より聴取。
16. 1961年当時、穴澤一夫は国立西洋美術館に所属し、パリの国立近代美術館にブランクーシのアトリエを移築する仕事に関わっていた。そのアトリエはのちにポンピドーセンターへ移設され、現在は改装中である。
17. 編集部「女性館長は16%。日本の男女格差、美術界でも顕著」『美術手帖』2019年12月17日公開、<https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/21075>(2024年7月30日アクセス)